

今年度の教師力向上研修会は、テーマ「子供主体の活動を支える」とし、小学2年生活科「わたしは小さなおひゃくしょうさん」の実践を基に、全4回シリーズで開催しています。

第3回は福光東部小学校にて「**社会性**を育む先生の働き」について研修しました。学級で初めて収穫を迎えた子供の話から、あえて対立が起きるように仕組まれた授業を基にお話をされました。以下に、研修内容をまとめましたので、ぜひご参考にしてください。次回は最終回です。参加をお待ちしています。



1 今回の研修のポイント

- ・ 子供が自分で決めたそれぞれの選択と自分らしさを、お互いに語り合い、認め合えるような「人生型」授業の大切さ
- ・ 対立や沈黙があっても子供から出る言葉を「待つ」教師の姿勢
- ・ 日々の徹底した子供の観察の重要性

2 今回紹介された実践の場面（ワークシートの番号は、資料の赤字の数字）

(1) 【N くんの新収穫】 ワークシート②～③

→ N くんの話聞いて教室全体が温かい雰囲気になる。

(2) 【A くんの新発言で問題発生】 ワークシート④

→ A くんがすぐに赤くなるイチゴの苗をもらってきたことに、これまで我慢していた SU くんから猛反発を受ける。

(3) 【子供同士の対話】 ワークシート⑤～⑫

→ SU さんに共感するとともに自分のことを話し出す雰囲気になる。

(4) 【A くんの新発言の矛盾と緊迫した沈黙】 ワークシート⑬～⑭

→ A くんは矛盾を SU くん指摘され沈黙してしまう。

(5) 【SY さんの優しさ】 ワークシート⑮～⑲

→ 教師の A くんへの問いかけによって、SY さんの優しさが感じられる発言が引き出され、SU くんが歩み寄る。

（資料）配付されたワークシート



3 Q&A

Q：それぞれ自由に選んで育てる生活科なのに、なぜわざわざ対立を際立たせるのですか？

A：授業の目的は、あえて違い（対立）をつくり、「**お互いの違いを認め、分かり合うこと**」だから。

Q：対立が起きた際、教師の教訓でまとめず、深い対話にできたのはなぜですか？

A：予測不可能な状況だったが、「子どもたちがこの局面をどう乗り越えるか」を信じて、**じっと待った**から。

Q：Aくんが沈黙し涙を流すほどの緊迫した状況で、なぜ「おばあちゃんの言葉」を問いかけることができたのですか？

A：**朝は、いつも中庭で子供たちを迎えていた。**その日の登校時に彼がイチゴの苗を持ってきたのを見て、「今日これを持ってきたら、種派の子たちと衝突が起きるぞ」と事前に察知していたから。だからこそ、彼の行動の背景（おばあちゃんの愛情）を引き出すことができた。そして、おばあちゃんの想いを語らせれば、**日記を通じて「感受性が極めて豊かで、人の気持ちに寄り添える」と把握していた**3人の女の子の誰かが、必ずおばあちゃんの気持ちを代弁して教室の空気を変えてくれるはずだと、子どもたちを100%信頼して一か八かの問いを投げた。



研修を振り返って

- ・他市の先生方も加わり、61名が参加されました。
- ・参加者の方々の振り返りより、
 - 子供の感情が昂るような問いかけや、学ぶ必要感のある授業構成に挑戦してみたい。
 - 発言の表面的な部分だけを捉えるのではなく、子供一人一人の家庭環境、これまでの生活経験、さらには当日の朝の様子等、目に見えない背景にまで思いを巡らせて深く「見取る」ことの重要性を再認識した。子供を丁寧に観察することが、授業の展開を予想したり本音に寄り添った支援を行ったりするための土台になる。
 - 自分の考えを安心して伝え、聞き合えるような関係性や学級の雰囲気を作りたい。
- ・このような意見が多く見られました。
- ・講演の最後にお話しされたこの実践に出てきた子供のその後のエピソードについて、どの先生も真剣に聴いている姿が印象的でした。
- ・今回は、「**子供にとって価値ある評価とは**」です。多くの先生方の参加をお待ちしております。